

救急病棟における手指衛生の遵守率向上のための具体策

～手指衛生キャンペーンの取り組みと効果について～

救急病棟 真 貝 俊 枝 北 堀 裕 子
小 峠 晶 子 山 田 妙 子

I. はじめに

感染対策は患者と医療従事者の健康を守り、質のよい医療を提供するために行うという意義があり、全員で取り組まなければ成果は上がらない。基本は手指衛生であり、決して高度な手技ではない。頭では理解していても手指衛生が充分にできていないため、多くの現場では手指衛生の遵守率が50%前後に留まっている。当病棟でも多忙や他の職員が遵守しないことを理由に認識が低下していき、習慣的に実施できていない状況はアウトブレイクの危険にさらされる。手指衛生の認識を高め正しい方法と適切なタイミングで習慣化できること、お互いに他者の手本となり、モニター効果を果たすことを目的に手指衛生キャンペーンを実施した。今回スタッフヘアアンケートを行い、その効果と今後の活動の方向性について知ることができたので報告する。

II. 研究方法

手指衛生キャンペーンの実施方法

1. 朝の申し送り時、約4分で行う。

参加者は半日・日勤・深夜のスタッフで平均10人。

2. リーダーが手順を読み上げる。

衛生的な手洗いのシミュレーションと手指消毒のデモンストレーションのどちらか1つを行う。

3. 準備段階で各自自己チェック→タイミングの4原則の全員唱和→手指衛生の実施。

4. キャンペーンは1週間、2パターンを交互に1ヶ月毎行う。

III. 結果・考察

キャンペーンは全員効果があると答え、正しい手指衛生方法が習得できた。手指衛生方法と状況では、目に見える汚染がある時や高度に汚染する可能性がある場合、侵襲的処置ほど手指衛生ができていないが、目に見えない汚染の場合は手指衛生ができていない。手洗いなのか手指消毒なのか瞬時に判断できず、手指衛生が適切なタイミングと方法で習慣化できてい

るとはいえない。人の行動を習慣化するには「知識」「技術」「動機付け」の3つが必要といわれている¹⁾。「認識不足」は次の4点であった。目に見える汚染がある時、先に手洗いで物理的な汚染を除去しなければ消毒効果が不充分となること。床は汚染しているのだと認識すること。手袋の着用は手指衛生の代用にはならないという原則。目に見えない汚染は認識しにくい。手が触れる頻度が高いものは接触感染の要因となること。「技術」では語呂合わせのような言葉が覚えやすく、五感を使用した繰り返しが手技を習得し認識を高める効果となった。「動機付け」では視覚的に訴える資料を提示しスタッフの励みとなる数値結果をフィードバックしていくことが必要だと考える。手指衛生ができていない理由は多忙という意見が多かったが、緊急を要する場面は頻繁に起きている訳ではない。モニター効果については6割くらいができていないと答えた。「笑顔は人々に感染します。CDCが唯一コントロールできない感染症は笑顔である」といわれており²⁾、このプラスイメージで働きかけていきたい。キャンペーンの内容については全員が良い。期間については1人のみ悪い。全員が継続する意志があると答えた。マンネリ化しないように適度の危機感と刺激を与え、短時間で楽しくできるよう工夫し継続していく。

IV. おわりに

手指衛生は医療従事者の最低限のモラルである。見ているのは医療従事者だけではなく、患者とその家族でもある。見逃さない、見逃さないという病棟の風土作りが大切であり課題である。

引用文献

- 1) 一木 薫. わかりやすい手指衛生マニュアル作成ポイント①. INFECTION CONTROL 2008; 17(5): 33.
- 2) 土井英史. 聴衆に響くプレゼンテーション技法. INFECTION CONTROL 2006; 15(9): 74.